

今月の主題は「腺境界と胃病変」である。主題論文が6本、研究論文が2本で、どれもたいへん読みごたえがあって、まずまずこの企画も成功したと胸をなでおろしている。

もともと、臨床研究者として腺境界にはじめて注目し、大きな業績をあげられたのは、いうまでもないが、大井 実先生である。先生の消化性潰瘍発生に関する二重規制学説は、外国の研究者でも知らないものはないくらい有名で、われわれ後学のものもいささか鼻が高い。しかし、腺境界の問題を臨床家の手で、臨床的な方法論で検討できるようになったのは、そう古いことではない。ある意味では、腺境界を純然と臨床的視点から論ずることは、ひとつの「タブーの叢林」に足をふみいれてしまうことだったのかもしれない。いかんせん、腺境界を識別する方法論をわれわれはもっていなかったのである。腺境界を十分検討できる方法論をもたなかったことが、この問題にタッチすることを忌避させたのである。それが、最近いくつかの有力な方法が出現したことによって、腺境界をめぐる検討はにわかには活発になった。われわれは、いまはじめてこの大きな臨床的課題にチャレンジする勇気を与えられたのである。おそらく、現況でも、この領域の研究レベルは世界の水準を抜いているだろう。日本列島という島国に特有なナショナリズムではないと思っている。更に、この主題号をあしがかりとして飛躍することを願って止まない。

<竹本 忠良>

---

<編集> 早期胃癌研究会